【ポスター発表】

相談援助実習における構造化された実習プログラムの有効性

－実習評価表とレジデンシャル・ソーシャルワーク９機能を基本として－

○　障がい児入所施設 希望学園　　長濱　章雄（7906）

越石　全（札幌医学技術福祉歯科専門学校・6710）

キーワード：相談援助実習、実習評価表、RSW9 機能

１．研 究 目 的

時代のニーズに合わせた実践力の高い社会福祉士の養成を行うために、社会福祉士養成課程における教育内容等の見直し（2009 年新カリキュラムの導入）が図られているが、その中の「相談援助実習（180 時間）のねらい」では、以下のように記されている。

・相談援助実習を通して、相談援助に係る知識と技術について具体的かつ実際的に理解し実践的な技術等を体得する。

・社会福祉士として求められる資質、技能、倫理、自己に求められる課題把握等、総合的に対応できる能力を習得する。

・関連分野の専門職との連携のあり方及びその具体的内容を実践的に理解する。

合わせて「相談援助実習のねらい」に対する、実習生が受けるべき指導内容と巡回指導を通して実習指導担当教員が行うべき個別指導内容が 8 項目で具体的に記されている。これらを踏まえた実習指導において、実習生、実習指導担当教員、実習指導者の 3 者が、実習生の状況や課題等について協議し、且つ実践力の高い社会福祉士養成に合わせた実習が行えるべき、構造化された実習プログラムの作成と有効性を示すこととする。

２．研究の視点および方法

本研究では、構造化された実習プログラムの作成を行うため、社会福祉士教育に携わる養成機関教員との協同でプログラム作成を行っており、教育現場と実習現場の視点を合わせることで、より実践力の高い社会福祉士養成につながる構造化された実習プログラムの作成を目的としている。作成の基本視点における援用では、日本社会福祉士会編集の社会福祉士実習指導者テキストに示されている「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」の流れを縦軸とし、横軸には、「実習プログラム（実習体験）」「実習のねらい」、実習で学ぶべき「価値」「知識」、実習で求められる「技術」、「文献資料提示」「実習指導上のポイント」を設定している。また、具体的なプログラム内容として、社会福祉士養成校協会北海道ブロックで導入されているカリキュラム改正に合わせた新評価表の評価項目（総合評価を除く 84 項目）への対応と、北海道ブロックで推奨されているレジデンシャル・ソーシャルワーク 9 機能を踏まえた内容を意図して作成している。

実際に作成されたプログラムを相談援助実習に用いたことによる有効性を確認するにあ

たり、実習指導者による実習遂行上の有効性、実習指導担当教員による実習の進行状況の確認とスーパービジョンにおける有効性､実習指導者から見た実習生への指導上の有効性、アンケートを用いた実習生自身による主観的有効性を確認している。

３．倫理的配慮

実習プログラム作成では、養成機関教員からの情報提供の了解と作成協力、事業所における各部門へ実習受入の了解と指導協力を仰ぎ、提示の際は匿名性を考慮することで作成を行った。実習生へのアンケートでは、匿名性の説明と了解の基に記入を依頼している。

４．研 究 結 果

作成した実習プログラム構成は、縦軸を、「事前学習」「事前訪問」「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」「実習後指導」としているため、「事前学習」「事前訪問」の内容については､事前訪問時に基本となる実習プログラムを提示して､事前学習の方向性・必要性と訪問時内容の説明を行っている。合わせて実習生が作成した実習計画書における「実習目標」「実習達成課題」を確認のうえ、実習プログラム内容の確認・協議・修正を行うことで、実習目標・課題設定と実習体験に乖離が生じない様にしている。

実習指導者の視点では､「職場実習」「職種実習」「ソーシャルワーク実習」（前半・後半）における段階的実習指導の意義、高いレベルでの専門性の研鑽、スーパービジョンを通した実習状況の段階的確認が行えており、実習計画の課題に合わせた実習指導の有効性が確認できている。また、一日毎に明確な段階的プログラムが設定されているため、実習指導者と実習生のスーパービジョンにおいて、振り返りとしての有効性が感じられた。

実習指導担当教員の巡回訪問時における学生との３者スーパービジョンでは、縦軸としての各段階に合わせた実習の進行状況､目的･課題の達成度を確認することができており、構造化された実習プログラムの有効性が感じられた。またアンケートを用いた実習生の主観的自己評価（目的と課題の達成）においても実習プログラムの有効性が示されている。

５．考 察

構造化された実習プログラムを用いた相談援助実習の展開は、実習生、実習指導担当教員、実習指導者のいずれにおいても、有効な実習につながっていると思われる。入所施設内実習指導では、スペシフィックな実習展開になる傾向にあるが、ソーシャルワークにおける社会福祉士像をイメージし、尚且つ総合的に対応できる能力を習得することを目的とするならば、ジェネリックソーシャルワークの展開を欠くことはできないため、ミクロ、メゾ、マクロの視点を踏まえた構造化された実習プログラムが必要になる。したがって、構造化されたプログラムの作成と３者関係の連携における実践力の醸成は欠かすことができない重要な鍵といえる。